

2013年度第1回  
琵琶湖博物館協議会

日 時 2013年11月6日(水)

13:30～16:30

場 所 滋賀県立琵琶湖博物館 1階セミナー室

会 議 次 第

1 開 会

2 企画展示「いきものがたり～生物多様性 湖国から 世界から～」等  
館内の見学

3 議 事

(1) 琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について

(2) その他

4 閉 会

[午後 1時32分 開会]

## 1 開会

○司会（中鹿副館長）：それでは、ただいまから平成25年度第1回琵琶湖博物館協議会を開催させていただきます。

私、本日の司会進行を担当いたします当館の副館長の中鹿でございます。どうぞよろしく申し上げます。

本日の会議につきましては、公開という形になってございますので、ご了承いただきたいと思っております。また、当協議会の定足数は委員の半数以上となっておりますけれども、本日は5名の方が欠席ということで、15名中10名の方の出席をいただいておりますので、会議が成立していることをご報告申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、篠原館長よりご挨拶を申し上げます。

○篠原館長：琵琶湖博物館の篠原です。どうも、きょうはご苦労さまでございます。

きょう、審議していただくことというのは、皆様のお手元にもいっていると思っておりますけれども、新琵琶湖博物館創造ということで、いわゆるリニューアルということですが、皆様にはいつも琵琶湖博物館の新しいあり方を改善しなくちゃいけない点につきまして、非常に貴重な意見をいただいております。リニューアルの創造の新しい計画には、今まで皆さんに議論していただいたことも十分、リニューアルできる部分では、それを入れて計画を立てております。

一方では、施設等の改善も考えていかななくてはいけないのですが、これは別途に考えておりますので、きょうは計画の中の展示のこと、リニューアルということについてお話をさせていただいて、それについてのご意見をいただくという場です。新しい博物館を28年度にスタートさせたいと思っておりますので、皆さんの貴重な意見をいただいて、簡単には予算が通るわけではないので、変えなければならない面もいっぱい出てきます。できる限りその意見を入れて、できることをしていきたいというふうに考えております。よろしくお願ひしたいと思っております。

○司会（中鹿副館長）：会議に入ります前に、本会議にご出席の皆さんをご紹介させていただきます。

お席の順での紹介です。

市川会長さんです。

河上委員さんです。

菊池委員さんです。

津屋委員さんです。

中田委員さんです。

橋詰委員さんです。

伴委員さんです。

前田委員さんです。

松江委員さんです。

山本委員さんです。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、本日、出席をしております事務局の職員を引き続き、ご紹介をさせていただきます。

○事務局（用田上席総括学芸員）：学芸員の用田です。よろしくお願いいたします。

○事務局（グライガー上席総括学芸員）：学芸員のグライガーです。よろしくお願いいたします。

○事務局（藤岡上席総括研究員）：藤岡と申します。よろしくお願いいたします。

○事務局（高橋上席総括学芸員）：学芸員の高橋でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（田中総務課長）：総務課の田中と申します。よろしくお願いいたします。

○事務局（桑原所長）：学芸員の桑原です。よろしくお願いいたします。

○事務局（八尋研究部長）：研究部長の八尋です。よろしくお願いいたします。

○事務局（藤村室長）：新琵琶湖博物館創造準備室長の藤村です。よろしくお願いいたします。

○事務局（白井環境政策課課長補佐）：県の環境政策課の白井でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（戸田専門学芸員）：学芸員の戸田でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（里口専門学芸員）：学芸員の里口です。よろしくお願いいたします。

○事務局（榊永専門学芸員）：榊永です。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：議事に入ります前に、現在、企画展「いきものがたり～生物多様性 湖国から 世界から～」を開催しております。企画展を中心に、委員の皆様には館内をごらんいただきたいというふうに思っております。

それでは、担当者がご案内いたしますので、移動をお願いします。

見学をしていただいた後、議事は14時30分から、この場で開催をさせていただきます。どうぞよろしく申し上げます。

## 2 企画展「いきものがたり～生物多様性 湖国から 世界から～」等館内の見学

○司会（中鹿副館長）：案内は、担当学芸員の中井が案内させていただきます。

○中井専門学芸員：中井でございます。

それでは、今から企画展示を中心にご案内させていただきます。

[午後 1時39分 休憩]



[午後 2時34分 再開]

○司会（中鹿副館長）：皆様、大変お疲れさまでございました。ありがとうございます。

それでは、ただいまから議事に入らせていただきます。

これからの議事進行につきましては、琵琶湖博物館の設置条例に基づきまして、当協会の市川会長に議長をお願いしたいと思います。

それでは、市川会長、どうぞよろしく申し上げます。

## 3 議 事

○市川会長：それでは、会長として、以後の議事の進行をさせていただきます。皆さん、どうぞ協力よろしくお願いたします。

### (1) 新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について

○市川会長：それでは、本日の議事に入らせていただきます。

新琵琶湖博物館の創造について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（藤村室長）：新琵琶湖博物館創造準備室の藤村です。よろしく申し上げます。座って説明させていただきます。

まず、私のほうから「新琵琶湖博物館創造基本計画中間とりまとめ」という資料があります。その全体的な資料と、最後の「企業連携」、そして「広報・営業活動展開」の説明をさせていただきます。

展示と交流の中身につきましては、担当学芸員のほうから説明をさせていただきます。

まず、1ページの点線で囲んでいる部分ですが、琵琶湖博物館はこんな博物館を目指

しますということで、3点の整理をしております。

まず1点目が、「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、ともに行動する博物館、ということです。

県では、平成22年10月に、琵琶湖の総合保全の指針であるマザーレイク21計画の第2期計画が改定をされております。「琵琶湖流域生態系の保全・再生」「暮らしと湖の関わりの再生」、この2つの柱となりました。

琵琶湖博物館は開館以来、「湖と人間」というテーマのもと、先駆的にこうした課題に取り組んできたわけですが、さらにそうした取り組みを進めて、琵琶湖の大切さに気づき、主体的な行動を起こす人びとを応援するため、県民とともに考え、ともに行動する博物館を目指していきたいと思います。

2点目が、次代を担う人が育つ拠点となる博物館です。

琵琶湖博物館の基本理念の一つに、交流の場としての博物館がございます。これは多くの人びとによる幅広い利活用と交流を大切にする博物館を目指すということですが、リニューアルでは体験・交流から一歩進みまして、地域での活動、次代を担う人が育つ拠点としての博物館を目指していきたいと考えています。

3点目が、地域活性化の核となる博物館です。

琵琶湖博物館は博物館であると同時に研究施設であり、文化施設、環境学習施設、観光施設としての顔を持っております。こうした琵琶湖博物館の持つ多面性を活かしまして、琵琶湖・滋賀を内外に発信し、滋賀県のアイデンティティを高め、地域活性化の核となる施設を目指したいと考えています。

次に、2ページ目です。

「琵琶湖博物館17年の実績と課題およびリニューアルの方向性」でございますが、まず2ページのほうでは、博物館の基礎機能である研究・調査、展示、交流、資料について整理をしております。

まず研究・調査では、外部機関と連携した共同研究、プランクトン、昆虫等の新種の発見など、さまざまな成果がございます。琵琶湖博物館の研究成果は、例えば琵琶湖に繁茂する水草の調査や生物多様性の研究など、県が行っております水草対策やレッドデータブックの作成に活用されたりもしてきました。開館以来、17年の調査・研究を通じて、「湖と人間」の関わりについて新たな考え方や理解が進みまして、こうした成果

を展示に反映をした取り組みが必要になると考えております。

展示では、地域の人びとと協働して、企画展示やギャラリー展示を開催し、地域との協力関係というのが構築されまして、博物館活動の基盤が形成されてきたと思います。昨年6月には来館者数800万人を達成したところです。

交流では、「はしかけ」や「フィールドレポーター」という地域の人びとが主体的に博物館活動に関わり、こうしたことは他館のモデルにもなっておりまして、高く評価をされてきました。リニューアルでは、だれもが気軽に参加でき、多様な関わり方で自己発見ができ、実践につながる新しい博物館の活用が求められると考えています。さらに、環境への関心と問題解決能力を高め、主体的に実践できる、いわゆる人が育つ環境学習の拠点としての機能強化が必要だと考えています。

資料関係では、これまで85万点の資料を収集してきましたが、そのうちの多くは、地域の人びとが博物館の活動や価値を認めていただき、寄贈をいただいたものです。交流や地域活動など、多様な資料利用の要望に応えられる基盤が整ってきております。

こうした実績と課題を踏まえまして、リニューアルの方向性としては、まず、これまでの成果を常設展示に反映すること。そして、今後とも地域の人びととの協働を進めまして、参加型・体験型の展示を取り入れ、来館者にフィールドのおもしろさを伝え、地域での活動のきっかけを提供すること。そして、交流の場から人が育つ博物館へと進化をしていくこと。最後に、これまで収集してきた実物資料をふんだんに使いまして、迫力のある感動を呼ぶ展示をつくっていくこととなります。

次に3ページ、博物館の多面的な機能です。

まず1つ目として、「教育・文化・観光施設として」の機能がございます。琵琶湖博物館は県内の7割の小学校が利用するなど、学習の場として高い評価をいただいていると思います。また、観光施設としても、県内観光入込客数が22位、文化施設としてはトップの観光客の皆さんが訪れております。

こうしたことから、リニューアルでは、琵琶湖や環境に対する県民のよりどころとしまして、そして県外の人びとには、関西の命の水を預かる琵琶湖の象徴施設として、琵琶湖博物館のプレゼンスを県内外で高めていきたいと考えております。

2つ目として、近年の少子高齢化や成熟社会の時代にありましては、博物館の新たな利用ニーズが高まっていると思います。例えば、昔の遊具などを高齢者の方が懐かしく

使って、そして子どもたちにそうした使い方を教えるといった、そういう交流の場をつくるなど、博物館の新しい活用のあり方を提示していきたいと考えております。

3つ目として、関西広域での環境学習、博物館ネットワークの拠点として、環境学習への取り組みや情報の受発信を強化していく必要もございます。

4つ目として、国際研究・交流の拠点として、隣にありますILEC（国際湖沼環境委員会）との連携を強化して、アジアを初めとする世界の湖沼研究の窓口を目指していきます。

次に4ページでございますが、上段は来館者数の推移を示しております。平成12年に50万人だった来館者数が、平成24年には36万人まで減少しました。その大きな要因は、この棒グラフの上が薄い黒になっていますが、一般（大人）の来館者の減少によるものです。

こうしたことから、新たに、「高度化・複雑化した情報をわかりやすく、タイムリーに伝える博物館」、「大人も日常的に楽しめる博物館」という2つのコンセプトを掲げましたのは、昨年度のビジョンでもお示しをしたところでございます。

そして、「常設展示の再構築」では、発信力の高い展示とすること。これは当然ですが、最新課題にも対応した展示、いつでも新鮮な展示、大人も子どもも楽しめる参加型、体験型の展示などを目指していきたいと思っております。

「交流空間・交流機能の再構築」では、体験交流を通じて、学びと発見があり、実践へとつなぐ交流、博物館と地域をつなぐ交流、そして琵琶湖へ誘う屋外交流空間の整備も行っていきたいというふうに考えております。

それでは、展示と交流について、具体的な検討内容をお話しさせていただきます。

○事務局(里口):展示のリニューアルのとりまとめを担当しております里口と言います。

よろしく申し上げます。座って説明させていただきます。

5ページの上のほうに、「展示ストーリー」と書いた部分があります。そちらは去年のビジョンでも書かれていました。全体的な流れをこういうふうに考えるということです。「現在」というものを捉え直すため、現在がどのようになっているのかということを知っていただくために、3つの大きな時間スケールでそれぞれの展示室で表現すると。

A展示室では、琵琶湖の生い立ちの400万年という非常に長いスパンの中で、どのように自然がつくられてきたのか、人間というのはどういう存在であるのか。

B展示室では、この周辺に人びとが住み始めてから、どのような暮らしの変化をしてきたのか、湖とどのような関わり合いを持ってきたのか。

C展示室では、現在、どのような自然環境や人の暮らしになっているのかということを抑え直そう。その現在というものが琵琶湖フィールドに当たるものですので、それでフィールドへ誘うというふうに考えております。

そういった大枠の中で、それぞれの展示室はどのような具体的な内容で考えるのかという議論をしてきました。A展示室、B展示室、それぞれ1ページを使って、詳しく説明しております。

A展示室は、非常に長い時間の中で、どのような自然の変化が起こってきたのか、人間というのはどういう存在なのかということを示しています。そのコーナーは絵で示しています。また興味があれば見ていただきたいのですが、大まかには、体験的なコーナーであったり、資料をふんだんに見せるというコーナーであったり、地域の人びととつくる展示のコーナーであったりというものを考えております。これはA展示室以外の展示室でも、その時間というふうに考えています。

6ページ目はB展示室ですけれども、B展示室は、歴史の中で人びとがどのような暮らしをしてきたのかということですが、今回のリニューアルで考えているのは、身近な自然と暮らしがどのように関係し合って、今のような状態になってきたのかという、自然の変化とそれに関わる人びとの暮らし、もしくは人びとの暮らしが自然にどのような影響を与えてきたのかというようなことを展示しようとしています。

7ページ目がC展示室の内容です。C展示室は、現在どのようになっているのかということを表示しようとしています。その現在というものの中で、我々が住んでいる自然環境や人間の暮らしというものが、どのように関係し合っているのかということを表示では伝えるべきであると。これまでの研究で、そういう関係性の一部がわかってきたものがありますので、その関係性というものに着目して、C展示室は構成していきたい。その中で、それぞれの場、例えば田んぼであるとか、沿岸帯であるとか、川、森、そういった場の中で自然環境、生き物、人間の暮らし、活動がどのように関係し合っているのかということ強く打ち出そうというふうに考えております。

8ページ目は、C展示室の1階部分の水族展示に当たる部分です。水族展示は、主に生き物の生態をじっくり見てもらおうという展示室ではあるのですが、こういっ



た生き物がどのように人間と関係し合っているのかという、その関係性の部分をもう少し水族展示では着目しようというふうに考えております。

もう一つは、琵琶湖、もしくは琵琶湖周辺の目に見えない小さな生き物たちが、この自然環境に非常に大きな影響を与えている。特に琵琶湖の中では、琵琶湖生態系を根底で支えている小さな生き物たちがいます。そういったものに特に注目して、マイクロアクリウムというものをつくったりしながら、楽しみながら、琵琶湖のことを知ってもらおうというふうに、新しい展示を考えています。

展示としては、以上です。

○事務局（柊永）：交流のまとめをしています柊永と申します。よろしくお願ひします。座って説明させていただきます。

9ページになります。「交流空間・交流機能の再構築」です。

琵琶湖博物館は、はしかけ制度やフィールドレポーター制度など先進的な取り組みを行ってきました。観察会や体験教室・講座も年間200回以上開催し、いろいろな活発な交流活動を行ってきました。

しかし、この17年間で課題も見えてきました。それは大人が日常的に楽しめる魅力に欠ける。湖畔の立地条件にあるのですけれど、それを十分に活かしていない。あるいは、制度参加者、先ほどのフィールドレポーター制度も参加者の固定化が見えてきた。また、多人数の団体の屋内での受け入れ場所も不足してきたということがあります。

そこで、リニューアルでは、こう変えたいと考えています。大人も楽しめる仕掛けがあり、プログラムも充実していこうということです。そして、樹冠トレイルにより、博物館から琵琶湖へ誘っていこう。だれでも博物館での活動に参加しやすい仕組みをつくる。最後に、学校・一般団体向けの屋内の昼食場所を整備するということです。

具体的には、例えば大人も楽しめる仕掛け、プログラムになってくるのですけれども、大人のディスカバリーというものを考えています。ここでは、大人は遊びながら学んで、楽しめるような空間をつくっていきたい。例えば、本物の剥製に触れたり、感覚で理解するハンズオン展示、あるいはそれを通じて自分からさらに調べていく、知りたくなっていけるような仕掛けを具体的に盛っていきたいと思っています。あるいは、我々学芸員や資料整備のスタッフが、本来ではワクワクするような資料整備、あるいは研究活動を実際に展示室の中で来館者に見てもらい、伝え、対話交流していただくということを考

えております。

また、ワクワク体験スペースという中では、いつでも博物館に来たら楽しく体験できるようなプログラムや仕組みを考えております。それから、いつ来ても、家族連れだけではなくて、カップルやシニア層など、どんな人にでも時期折々に楽しめる多様なプログラム体験をしていきたいと考えております。

また、レストラン・ショップについても、地元食材や特産品を味わえるレストラン、あるいは琵琶湖博物館にしかないオリジナルグッズなど、品ぞろえをしていきたい。そして、楽しんでもらいたいというふうに考えております。

次に10ページ、樹冠トレイルです。

琵琶湖博物館は本当に琵琶湖のそばにあるのですが、なかなか博物館、それから琵琶湖まで近づいていかれるのは17年間余りなかったもので、今度は博物館から誘うような形で樹冠トレイル、それから木を観察し、あるいは琵琶湖が一望でき、比叡山から望めるようなトレイルをつくっていききたいと考えています。ここでは琵琶湖をバックにしての記念撮影もできるような展望台もつくりたいと考えております。

そのほかにも、交流・来館者サービスの向上につきまして、環境学習センターの強化や、はしかけ、フィールドレポーター、あるいは地域で活動している人たちの活動室をつくっていききたい。あるいは、我々17年間の悲願でありました屋内でのベッドスペースをつくっていききたいと考えております。

また、最近進んできました情報通信技術（ICT）を館内でスムーズに使えるようなWi-Fiの整備、あるいは館内だけではなくて、館と館外におられる方との双方向のリアルタイムでの情報通信ができるような環境を整備していききたいと考えております。

最後に、交流機能ですが、このほかに例えば、地域をつなぐ交流では、向かいにありますILEC（国際湖沼環境委員会）などとも連携しまして、情報や資料の収集、あるいは研究、交流、展示の国際化などを図っていききたいと考えております。

以上です。

○事務局（藤村室長）：それでは、11ページ、「企業連携と外部資金活用」です。

企業では、社会貢献活動が活発に行われるようになりまして、特に、琵琶湖の流域で事業を展開する企業の皆さんは環境意識が高く、生物多様性保全などの活動に積極的に取り組んでおられます。琵琶湖博物館はこれまで、生物多様性に関する研究などに取り

組んできましたが、そうした知見を企業のビオトピア、生物多様性保全の活動に活用を  
していただいております。今後とも、企業のこうした博物館へのニーズは高まるものと  
考えられます。

今後は、こうした企業連携の博物館活動に明確に位置づけ、企業の皆さんとともに、  
「湖と人間」の共存関係を築く新たな活動を展開していきたいというように考えており  
ます。そして、琵琶湖博物館の調査・研究成果や、知見を活かして企業との共同研究を  
進めるなど、新しい連携のあり方を提示するというようなことも考えております。

こうした活動を通じまして、企業も大変厳しい状況ではあるのですが、企業の社会貢  
献活動と連携をして、リニューアルにかかる資金協力というようなことを受けるような  
道も目指していきたいというように思っております。

次に、「効果的な広報・営業活動の展開」でございます。リニューアルによる来館者  
数の増加などの効果が一過性のもので終わることなく、また琵琶湖博物館の認知度を高  
めて、調査・研究成果を広く発信していくためにも、広報・営業活動に取り組んでいき  
たいというように考えております。

現在、県内の認知度は90%と高いですが、京阪神・東海という近隣の県外は30%  
と非常に低くなっております。こうしたことから、マスメディアとの共催イベントによ  
る認知度の向上や、これまで手がかけられていなかった海外での認知度の向上に努めて  
いくとともに、これは今後、県とも協議をしていく必要がありますが、広報・営業につ  
いての専門性の高いスタッフの配置も行っていきたいというふうに思っております。さ  
らに、より多くの人に博物館を利用していただくために、割引制度などの料金改定の検  
討も行います。

また、他機関との連携としては、ビジターズビューローや旅行者との連携を進めま  
して、これまで関係の希薄であった企業・大学等とのパートナーシップ協定による連携  
なども検討していきたいというふうに考えております。

最後に、琵琶湖博物館へのアクセスの改善ですが、まず情報へのアクセスの改善とい  
うことも行っていきたいと思いますし、博物館への物理的なアクセスの改善ということ  
で、地元草津市、バス会社等と連携をして公共交通機関の便をよくしていくということ  
や、博物館が湖岸にあるという立地条件を活かした湖上交通、そうしたものも検討をし  
ていきたいというように思っております。

次に12ページ、「施設整備」です。

ユニバーサルデザインを一層推進していくということは、当然に取り組んでいく必要がございますし、開館後17年が経過をしております。既存施設の計画的な保全・改修、施設・設備の長寿命化計画、あるいは有効活用を図っていく施設長寿命化計画、そうしたものも策定をしていく必要があるかなと思っております。

最後の13ページは、これまでの検討経過をまとめたものです。

本日、ご審議をいただいております琵琶湖博物館協議会を初め、県民ワークショップ、外部有識者の意見聴取、アンケート調査などを実施し、本年度は有識者から成る基本計画検討会を開催いたしまして、専門的な助言をいただいているところでございます。

基本計画の中間のまとめをさせていただきました。まだまだ詳細については、後半、詰めていく必要があると思っておりますが、こうした方向性が見えてきましたので、ご報告をさせていただきます。

以上でございます。

○市川会長：ありがとうございました。

それでは、議題の新琵琶湖博物館の創造について議論を進めてまいりたいと思います。

ご質問、ご意見等、どなたからでも結構ですので、よろしく願います。

どなたか、ご意見はございませんでしょうか。

はい。

○津屋委員：資料の1ページの絵の部分ですけど、これはコンセプトを絵にした大事な資料だと思うのですが、全然文字が見えなくて、ここに一体どういう要素が出されているのかなど。こういう絵に落とし込むというのは、この絵を読み解くということがすごく大事なので、できたら、見える資料をいただくと助かります。

○事務局（藤村室長）：すみません。コピーの関係で薄くなってしまいました。カラー刷りをしますと見えると思いますので、また用意をしてお渡しさせていただきたいと思っております。

○津屋委員：今、会議の場ではもらえませんか。

○事務局（藤村室長）：そうしましたら、昨年つくりましたビジョンがございますので、それをお渡しさせていただきます。

○津屋委員：こういう会議とか、さまざまな専門家の方の助言を経て、ここにたどり着か

れていると思いますが、専門の方がどのような助言をくださったのか、聞かせていただきたいと思っています。多分、今までの琵琶湖博物館の課題を挙げられて、そして新たな提案があって、それがここに反映されてはいるのかもしれませんが、特に13ページの(3)(4)あたりで、こういう提案があったというようなことでお聞かせいただけると、すごく参考になるのですけど。

○事務局（藤村室長）：そうでしたら、私のほうから。

まず、ピアレビューで国際化についてお話をさせていただきましたが、多言語対応というのが非常に重要であるというお話をいただきました。例えば琵琶湖博物館に入ってきたときに、「ようこそ」という、いろんな国の言葉で表示があるだけでも自分たちが歓迎されていると、そういったお話がありました。我々としては、こういう多言語化のパンフレットとか、それができたらなという考えはあったのですが、そういった根本的なお話からアドバイスをいただいたというようなことがございます。

それと、広報戦略も、新聞社の大津支局長さんにお越しいただきまして、いろいろとアドバイスをいただいております。そうしたことが今回、広報・営業戦略というようにところに反映をさせていただきました。

これは昨年度行っているものですが、本年度、5人の専門の先生に、基本計画検討会議ということで、委員になっていただいております。展示であったり、ユニバーサルデザインであったり、交流活動であったり、そうした専門家の先生ですが、特に琵琶湖博物館は交流に非常に力を入れてきております。そうした部分は高く評価をしていただいておりますが、一層そうしたことが必要であると。特に地域での実践につながっているような、そういう交流活動の展開をご指導いただいております。それは今回の基本計画の中にも反映をしておりますし、県の環境総合計画と同じような方向性ではないかなというように思っております。

その他、いろいろアドバイスはいただいておりますが、随所にそうした点を盛り込んだものが今回の中間とりまとめになっています。

○津屋委員：ありがとうございました。

○市川会長：ほか、ございませんでしょうか。

どうぞ。

○伴委員：大変わかりやすかったのですが、展示空間の再構築ということですが、

これだけ見ますと、今の展示とよく似ているような気がするのですけれども、どうい  
うところがリニューアルされているのかを同時に説明していただければ、わかりやすかつ  
たかなと思うのですけれども、それを簡単に説明していただくことは可能でしょうか。

○事務局（里口）：説明が終わった後に、何も説明できていないなということに、今、気  
がつきまして、一番大きな点は、ビジョンのときにも検討していたのですけれども、「現  
在」というものを知ってもらわないといけない。例えば、今のA展示室ですと、過去、  
琵琶湖はどうだったのかという展示で終わってしまっているように、多分、多くの来館  
者の方々にはそういうふうに見られているだろう。それを現在の私たちにとって、過去、  
起こってきたことがどういう意味があるのかというようなことを知ってもらうための展  
示として、今回のリニューアルは考えています。ですから、少なくとも、過去の内容を  
取り上げているA、Bと、C展示室も少し前の過去も取り上げるのですけれども、そう  
いった過去が現在とどう結びついているのかという、現在を理解するための過去とい  
うふうに捉えています。

もう一つ、例えばA展示室ですと、人間が出てこないのですけれども、今度のA展示  
室では人間がここ数万年ぐらいの間に日本にやってきて、そういった非常に長いスパン  
で見た場合の人間というのはどういう存在であるのか。

B展示室ですと、今は湖と人間活動というものに特化して展示をしているのですけれ  
ども、その湖の利用ではなくて、自然環境の変化と私たちの暮らしというものがどのよ  
うに関係し合ってきたのかということを見ようというのが、新しいB展示室の中心的な  
考え方です。

C展示室は、関係性が重要だというのは、博物館の準備室のころにも、そういう議論  
がされていたのですけれども、研究の内容が追いついていなかったというふうに考えら  
れるのですが、それぞれの場の中での人間活動であるとか、自然環境、生き物とかがど  
のように関係し合っているのかという、その関係性というものにもう少し突っ込んだ展  
示をしていきたい。

ですから、例えば森の中でこんな生き物がいる、人間はこんなことをしているとい  
うことだけではなくて、そういう生き物がいることによって人間がどんな活動をしてい  
るのかによって、それぞれがどう関係し合って、今の環境ができ上がっているのかとい  
うようなことを取り上げようというふうに考えています。

今の説明でよろしいでしょうか。

○伴委員：ということは、今の展示からちょっとマイナーチェンジみたいな感じと考えるといいですかね。

○事務局（里口）：マイナーチェンジですか、考え方は大きく変えているつもりですので、展示の内容も大分変わるというふうに考えているのですが、そのようにはなっていないという感じですか。

○伴委員：何か具体的な例があるとわかりやすかったと思うのですが、大分抽象的な感じだったので。

○事務局（里口）：展示するものとしては、例えばA展示室ですと、私はA展の担当なので、A展示室は全部わかっていると思うのですが、A展示室ですと、今の展示の中に気候の話は入ってこないのです。だけど、現在の社会問題で、気候温暖化とか、そういうのが非常に重要になっているのですが、多くの人たちはこれまで地球が暖かくなったり、寒くなったりというようなことを自然環境の中で繰り返しているということすら知らない人が多い。また、今の琵琶湖の底にたまっている泥の研究からでも、暖かい、寒いがあつたというようなことがわかっていますし、琵琶湖が残してきた地層の中にある化石を調べることによっても、気候の変化に伴って生き物の変化があつたというようなことがわかってきている。

そういうことをどうやったら知ってもらえるかということで、気候の変化というのを多く展示しようとしているのですが、単にこういう温度が変わってきましたよという曲線を書いてもだれも理解できないと思いますので、体験的にわかってもらえるようなコーナーとして、例えばちょっと前の、といっても2万年ぐらい前ですが、氷期の時代はどんなに寒かったのかというようなことを体験するコーナーをつくるとか、考え方はマイナーチェンジに聞こえるかもしれないけれども、展示物として多く変えて、より体験的なものにしていきたい。と同時に、これまで知られている研究成果をもっと使っていきたいというふうに考えています。

○伴委員：ありがとうございます。大分イメージできるようになりましたけど、今はないけど、こういう新しい展示ができるのですよと説明をしていただくと、すごくわかりやすいなと思いました。

○事務局（里口）：ちょっと勉強します。

○市川会長：先ほど企画展の案内をしていただいたときに、中井さんから鳥の剥製がたくさんあるが今展示できていない。こういうものを展示したいのだというような話がありました。博物館というところは性格上よい意味でも、悪い意味でも、コレクターがたくさんいるところで、その人たちが仕事で集めるのですから、膨大な標本等が集まっているはずですね。それから、物だけじゃなくて、研究成果を含めた情報もたくさん集まっているはずで、それをどう展示に活かしていくのかというのがこれからの課題だというふうに何回もお聞きしているのですが、この中からそれが見えてこないのですよね。

従来は、とにかくいろんな標本がたくさん並んでいるのが博物館だったのですが、ここはそうじゃない。私自身は、ここはそれでいいと思っているのですが、集めてきた標本を何とかしたいというのは、昔の博物館に戻そうとしているのか、そうじゃないのか。その辺がどうもこれではよくわからない。これまで集めた標本や情報を活かしたいというのは、どういうふうに活かしたいのかというところをちょっとご説明いただきたいなと思います。

○事務局（里口）：すみません。ぶっちゃけた話をさせていただきますと、まだそこまで議論ができていないというところですよ。といいますのは、我々がどういうことを伝えたいのかということを中心に今まで議論してきたのです。そこが大分固まってきましたので、今度はそれをどういう手法を使って展示をするのかという議論をようやく始めたという段階です。ですから、具体的な物であるとか、どんな展示物ができるのかということに関しては、ここの絵に書かれているコーナーぐらいしか考えられていないというのが現状です。

ただ、物を展示したいという思いと、物ばかり並んでいるとおもしろくなくなるというのがありますので、どうやったら、物をたくさん使っておもしろくできるのかということをお考えしているところです。たくさん展示、たくさん情報を詰め込み過ぎると、今度は見る側がおなかいっぱいになって嫌になってしまいますので、その情報をどれだけ簡素化できるか。展示物をずらっと並べて、こちらが満足するのではなくて、伝えたいことを伝えるためには、どれだけの情報をかいつまんで展示すればいいかということも今議論しているところです。

その手法の一つとしては、展示がえをしていくしかないだろうというふうに考えています。それは、持っている標本を入れかえていく、内容も入れかえていくということをお



していくことによって、たくさんの情報を伝えられますし、展示も変わっていきますから、何度来ても新しい展示が見られるということになるんじゃないかなというふうに、考え方としては今そう考えています。ただ、それを、じゃ、例えば展示ケースをどういうふうにしたらいいのかというところまでは、まだ具体的な議論はできていないということです。

○市川会長：頑張ってください。

○事務局（里口）：頑張ります。

○市川会長：どうぞ。

○前田委員：一利用者として申します。先ほどご説明があった「最近利用者が減ってきた」ことへの改善策として「大人が日常的に楽しめる博物館」の新構想が出てきたと思います。私はこれにとっても興味をもって、期待をしております。というのは、高齢化が進んで大人が何回も来るということもありますけれども、子どもが楽しめる博物館、琵琶湖博物館はその形がずいぶん整っていると思いますが、「大人が」というのは、やっぱりこれからかなあとと思います。ぜひともよろしくお願ひしたいと思います。

そこで、私も「大人が日常的に楽しめる」ではちょっと分かり難いので、計画案に「大人のディスカバリー」という言葉はたくさん書かれています、具体的にどのようなものを考えていらっしゃるか、少し教えてください。

○事務局（榊永）：ありがとうございます。例えば、「大人のディスカバリー」ですけども、我々学芸員、研究者がおもしろいものとか、美しいもの、例えば昆虫ですけども、そう思えるものをダイレクトに伝わるような展示、例えばこの形がかっこいいとか、ここがきれいだと書いています。子どもが見ても大人が見てもきれいなもの、美しいもの、そういうものがあると思うのです。それが見えるような、伝わるような展示です。

それが展示室だと、さわれたり、自分が角度を変えたりとかはできないのですけれども、例えば「大人のディスカバリー」だと、顕微鏡を使って自分で角度を変えたり、大きく写してみたり、あるいはそれを写真に撮ってメールで移送したりというような、我々がおもしろいなど思っていることがなかなかデジタルに伝え切れてなくて、もどかしい思いをしているんですけども、それを伝えるような場所、コーナーをつくってやっていきたいと。

そういう資料というのは、我々が日常の研究で使っているものなので、常に変えてい

きますので、また来たら今度は違うものと、そういういろんなことができるかなと。マニアック化過ぎず、おもしろいものをつくっていききたいなということで、ぜひ期待してほしいと思います。

○前田委員：少し理解しました。そこで、琵琶湖博物館は少し堅苦しいところがあると感じています。例えば、最近新しく、玄関のところに「今日はこんな面白いことがありますよ」という案内板ができましたね。私はそれを見たときに、「おお、やった！ちょっと方向性が変わってきたかな」と思いました。というのは、これまでは博物館に来て、何を見るのがよいかかわかりにくかったです。

でも、それはこの博物館のスタイルだと私は理解していました。そこを敢えてエンターテインメントとして面白くみせることはしない方針だと聞いていましたので。でも、来館者の期待を誘うという部分では、工夫をするべき点があるのではないかなと思います。例えば、「チョウザメの『餌やり』をします。ぜひお越しく下さい」という館内アナウンスがありますね。表現をもう少し工夫しないと、子どもも大人も『行ってみよう』という気持ちになれません。そういう工夫というのを少し研究していただいたらなと思いますので、お願いいたします。

○事務局（榊永）：ありがとうございます。

○市川会長：松江委員さんをご都合で3時半にお帰りになるということなので、その前に伺っておきます。

○松江委員：すみません、次がありますので勝手をいたします。思いつくところを、順不同でお話しをさせていただきたいと思います。

ハード面、ソフト面、いろいろあると思いますが、先ほど樹冠トレイルというところに関連すると思います。この博物館というところで、その標本を見るというレベルでは、もうだめだと思うのですね。やっぱり体験する、触れる、さわるところが非常に大事だと思います。特に琵琶湖ですから、きょうのお話でも、例えば琵琶湖の水に触れる機会が必ずあるんだと。ここへ来て琵琶湖の水に例えば足をつけるでも、手を触れるでもいい。そういうことができる空間が欲しい。子どもたちがはだしになって、そこに入って、何か生き物との触れ合いがあるとか、そういうものができるスペースというのが欲しいと思います。それを常時やるという。

それと、季節感というのが結構大事だなと。さっきもクニマスのお話がありましたけ

ども、その温度でしか棲めない生物というのがいるのだと思うのです。私たちがその生物と同じ気持ちになる、同じ場所を体感できるような疑似空間というのでしょうか、例えばマイナス何度のところでしか棲めないのだったら、そういうマイナス何度の部屋があって、そこではどうなんだというような体験ができると。高温多湿のところでしか棲めないものがあるのだったら、どうなんだとか、何か自分の肌で体験できるものが新しい博物館には欲しいなという気がします。

そういうことをお考えなのかどうかはわかりませんが、それと広報・集客活動のところでもお話がありましたが、広報・営業スタッフの配置と書かれています、専門性の高いスタッフを配置すると。じゃ、どういうスタッフを配置されるのか、どんな職員の方が来られるのか、その辺をイメージとしてぜひ教えていただきたいというふうに思います。

それと、これも前にもお話ししたかもしれないですが、マスコミに向けての発信ということが非常に大事だと思いますし、日常的にそういうプレッシャーみたいなものを開催される。特にそういう特別展のときなんかは絶対要ると思うのですが、お声がけをしていただければ、プレスの中は、興味があるかないかというのは個人の趣味にもよるのですけれども、来てくれると思うのです。そこで発信ができると思いますし、そういったプレス向けのものというのが必ず欲しいなと思います。

もう一点、いろんなイベント展開というのもあると思うのですが、新しい博物館の中にそういうイベントスペースみたいなものがあるのかどうか。さっきのいろんなイメージなんかではあるのかもしれませんが、集客につなげるとか、ここにも「マスメディアとの共催イベントの開催」と書いていますが、じゃ、どんなイベントを今考えておられるのか。それがコンサートのようなものなのか、どうなのかという、そういうものが具体的なイメージとして欲しいなと思います。

子どもも大人も興味を持ってもらえるというのが大事だと思います。以前テレビで、他局なんです、化石を見たいという子どもがいて、大阪でしたか、どっかの地下鉄の壁にいっぱい化石があるということに初めて気がついて、そのことですごくその子はワクワクして、こんなにいっぱい化石があったのかというようなことがテレビで取り上げられていました。

ところが、化石はその手の博物館でないと見られないのじゃないか。例えばそういう

ものがハード面であるのかどうか。琵琶湖博物館に行ったら、化石があると。展示されているんじゃないくて、建物の中にそういうものがあると。今度そういったものがハード面としてつくられるのであれば、より身近な博物館として行ってみたいという気がします。そんなところもひとつ参考にさせていただければと思います。

○市川会長：はい、どうぞ。

○橋詰委員：私は仕事で、展示をどうしたら子どもたちに見てもらえるかなというのを考えたりする機会があるのですけれども、先ほどご説明いただいた中に、新しいコーナーで寒い体験をしてもらおうというのは、すごく意味があると思いました。やっぱり五感に訴えるというのはすごく記憶に残るし、大事だなと思います。

ただ、子どもの様子をふだん見ている、今も「生きものがたり」の展示室で見ていると、私たちは気候が変わって、寒いときはこんなんだというのを伝えたいなと思っても、子どもは、寒いということは感じるんだけど、そこで松の実を見つける作業に夢中になるとか、「寒かったね。松の実、見つけたね」で終わるという可能性があって、それをどうしたらいいのかないつも考えているのですが、やっぱり見るということから、触れる、さわるという、もう一つ進化したもの、そこで発見がないとだめなんじゃないかなと思うんです。

発見するというのも何か見るポイントを持っていて、それをじっと見れば発見ができるんですけど、それを一般の人が見て、すぐ伝わるというのは難しいですね。そこで比較する対象があると、説明がなくても意外とそこから発見ができたり、間違い探しは子どもは大好きですし、私も好きですけど、そういう形で寒いところであれば、今現在のやつがとか、あと、クニマスというのを私もじっと見ていたんですけど、そこにヒメマス水槽があったらよかったなと思ったりもしたんですね。比較すると見えてくるものということがあって、それは個人の発見なので、そういうことがやっぱり心に残るのかなと思いました。

あと、カワセミのくちばしの形だったり、もしできたら、新幹線のバックにカワセミの絵をちょっとつけていただくと、あっ、こういうことかと。これがこういうことになったのかと。説明ではなくて、実際に見て、こういうことかというのわかる展示があると、子どもや私なんかは、とてもわかりやすいなと思いました。

あと、大きな広報はあると思うのですが、小さな広報というのは、例えばクニマ

スの展示を見ていて思ったのですけれど、クニマスのおもしろさって、発見した過程というか、どんなふうに発見されたかというのは、さかなクンがばあっと有名になったと思うんですけど、そういうこともあってよかったんじゃないかと。その子が、「あっ、さかなクンだよ」と言って、あそこに入っていくということもあると思うのですね。だから、そういうのももっとも利用させていただいて、まずそこに誘う小さな広報というか、琵琶湖博物館はとっても大きな博物館なので、一つ一つ足をとめるきっかけを、テーマを持ってない人も、「あれ、何だろう」と振り向いて立ちどまるという広報が増えたらいいなと思いました。

先ほどの「生きものがたり」の展示の中で、子どもたちの動きをちょっと見ていたんですけども、たくさんの野鳥の標本の展示は圧巻で、みんなあそこで立ちどまって、何を見ているのかなと思ったら、一人の子が、「鳥、鳥、鳥、鳥、鳥」と言っているんです。つまり、たくさんいるということに、すごく感動したのじゃないかなと思うんですね。だから、例えば何種類ということがあってもいいかもしれないし、何種類いるのだろうっていうような、どこかに、小さなフクロウさんでしたか、つぶやいてもらってもよかったかもしれないなと思ったり、「たくさーん！」と声を出している子がいっぱいいました。

だから、展示って難しいなと思うんですけど、メッセージがなかなか伝えられない。例えば木の箱の中なので、あけて、しめてと、すごく楽しいのだけれど、一人の子は、あけて、しめて、カタン、カタン、カタン、カタンとやって歩いている子もいたりとかして、そこで何か立ちどまるちっちゃな広報をフクロウさんにもっとつぶやいてもらうとか、テーマを持っていない私たちなんかは通り過ぎないように、「おっ」と思えるようなものをいっぱい工夫していただけると。それもできたら、150センチ以下、120センチぐらいの高さで、大きな文字で、やさしい内容で、今度の新しい博物館にもあるといいかなと思いました。

- 市川会長：松江委員さんにご都合があるということですが、何かありますか。
- 松江委員：先ほど幾つか質問したことに対して、今お答えを聞く時間がないので、また改めてお願いしたいと思います。申しわけございません。よろしく申し上げます。
- 市川会長：中田委員さん、どうぞ。
- 中田委員：中田です。今回の展示会で、高齢者、シニア世代のことも考えていただいて、

すごくうれしいなと思っております。私のかかわっているところはお年寄りの方もいらっしゃるって、老人会なんかでバスツアーをよくされるんです。そうすると、どこへ行こうかという相談を受けるんですけども、まずみんな足が弱っているから、あんまり歩きたくない。集まって御飯を食べられるところが欲しい。そして、お年寄りだからお寺的などところに行くという声はどうしても出てくるので、このB展示室に六道絵のことが出ていて、これはうれしいなと。そういうところに視点を持っていただけたなと思って、すごく喜んでいるんです。

そういうお年寄りに聞くと、意外と琵琶湖博物館に来ていないということをおっしゃるんですね。来た人も、「一遍見たから、もういいよ」みたいなことを言われるので、そうじゃなくて、季節ごとに何かあるよとか、そういうものを展示ができていいなと思うんです。

さっきから鳥の話が出てきますけども、私の家の庭に山鳥とか来ますと、あれ、何かなと思って見ます。滋賀県はお庭にいっぱい鳥が来るお家が多いと思うのです。季節的に、今この鳥が来ていますよというのをわかりやすく、その季節に合った鳥を、水辺、畑、山とかいうふうに分けて、季節ごとにそういう展示をしていただけると、何の鳥か、探しに行こうとか、これ、うちの庭に来ていた鳥やとか、そういうことがわかりやすくなると思います。小さいことですが、さっきの小学生の鳥のところだとまっていた子たちを見ていたら、小学生には、雄（♂）、雌（♀）の印がわからないんですね。だから、オシドリを見て、「これ、きれいやな。これが雄で、男のほうが華やかなんだよ」と言っても、その印がわからないから、イマイチわかってなかったなというところがありました。ちょっとそこだけ気になりました。

高齢者の話からそっちに行っただけなんですけども、ですから、高齢者の人を受け入れようと思うと、例えばちょこっとしたところに座れる場所が欲しいです。展示している間の邪魔にならない程度の座れるところを、いろいろ置いていただけたらありがたいなというのと、さっきもおっしゃっていましたが、今の展示のメインはここだよという、そういうものも展示の最初にあつたらいいなと思います。

話は変わりますが、樹冠のほうの展示をしようということがありました。そういうのは建物の屋上は利用できないんですか。実はこの間、岐阜県のほうにそういう展示をするところに行っただけなんですけど、博物館ではなく、資料館だったのですが、屋上のところ

に出て周りを見渡せる。しかも、その足元に、近くの山の模型があるのです。小さい模型ですけども、コンクリートでつくってあるので、その上に上がったりもできるのです。そういうことをしたら、琵琶湖や滋賀県内の高さや広さが実感できるんじゃないかなと思います。

そして、琵琶湖大橋のところの「イーゴス」という観覧車が今撤去されていますね。あれの高さが105メートルだったんですね。私は琵琶湖の説明をするときに、琵琶湖の最深は104メートルです。あの高さを逆転したら、琵琶湖の最深部なんだよと、よく説明に使わせてもらっていたんです。あれがなくなって困ったなと今思っているんですけど、琵琶湖に対しての深さの感覚がつかめるような展示、屋上の樹冠なんかと同時に、屋上を使ってそういうものができたらおもしろいなと思うんです。そういうのも一つの体感になるんじゃないかなと思います。

その2点のことで失礼します。

○市川会長：どなたか、お答えはありますか。

○事務局（柗永）：樹冠トレイルのご質問にお答えいたします。まず屋上を使ったらどうかというお話ですけども、僕らも最初、屋上をどんどん使いたいなと思っていたんですけども、今建っている建物にほかのものをつけると、建築基準法とかでややこしくなっていて、難しかったんです。

アドバイスをいただいたように、樹冠トレイルに展望台はあるのですが、琵琶湖の深さとか、これはぜひしてみたいなということを、聞いていて思いました。これは検討したいなと思っています。ありがとうございます。

○市川会長：河上委員さん、何かございますか。

○河上委員：中学校のほうで、生徒が琵琶湖博物館を利用させていただいて、ありがとうございます。本校は、きょうもここから解剖道具を借りて、イカの授業で一生懸命やっています。イカの口からお醤油を入れると食道のほうにつながっていくんですね。感激していました。あのイカがどうなるのかちょっと心配ですけど。中学生は環境教育の一環としてこの博物館を利用させていただいています。中の展示等については時間的な余裕がなくて、個人的に家族と一緒に見に来るといった機会を持つことによって利用してくれるといいなというふうには感じております。

今度リニューアルされていく中で、子どもたちは小学校のときに琵琶湖博物館に最初

に出会い、そしてそれを大人がもう少し家庭の中でうまく活用していけば、もっと大人の利用も増えるし、子どももまた違った興味、関心を持ちながら、この会館を使うのではないかなど。そういうところが広げていただける、何か新しいもののかかわりの中でつくっていただくとありがたいなと思います。

きょうは、「生きものがたり」を見せていただきました。もうちょっとお金をかけて展示ができるといいのかなと思いながら、大変申しわけない言い方ですけども、中学校でも文化祭等にかかわって環境展示をするときに、いろんなものを集めて、子どもたちも神経を使いながら、展示工夫をするわけです。学校もそういう発信をいろいろとやっているわけですけども、協働しながら、学べる機会、場所になればいいかなと思っています。

非常に期待しておりますし、中学校の教育の中でも、この琵琶湖博物館をしっかりと位置づけながら、また教育の中に取り込んでいきたいと思っています。ありがとうございます。

○市川会長：菊池委員さん、何かございますか。

○菊池委員：お話を伺っていて、まだ自分の言いたいことがうまく言葉にできないですけれど、今まではどちらかというと、博物館に来て展示を見るという、見学者と見学対象物という関係だったものを、自分たちがもう少し空間の中に入り込んで、いろんな実体験とか実感を伴いながら、そこに伝えたいことが溶け込んでいけるような感じの展示を目指していらっしゃるのかなというふうに、拝見して思っていたんですけども、それは本当にすごく楽しいことだと思います。

例えば、最初は大きなタイムスケールの流れの中で、自分が全然経験もしなかったようなダイナミックな変化を経験し、そこがだんだん自分にクローズアップをされていくような展示の仕方というのはすごく楽しいと思うんですけど、そのときに、私、博物館に来て思うんですけど、A展示室、B展示室、C展示室と、それぞれ出た瞬間に現実に引き戻されるというか、すごく気持ちが冷めてしまうところがあります。こういう展示をされるのであれば、AからB、BからCへ引っ張っていくための移動空間のプロデュースというのが、結構重要になってくるのではないかなというふうに感じました。

この間、佐川美術館にたまたまお邪魔したときに、平山郁夫さんの絵を見た後に、ほかの展示室に行くときの渡り廊下にシルクロードの地図が張ってあって、自分たちがラ



クダに乗って旅をしていくときの空間性を維持したまま、次の展示室に行けるようになっていたのですけれど、そういうような仕掛けがあるだけでも、かなり館全体を楽しむんだというようなイメージが広がってくるのかなというふうに感じました。

あと、そういったところに、先ほどおっしゃったような、夏場の鳥が、冬になったら冬場に変わっているとか、哺乳類の展示が変わっているというような形であれば、宝探しみたいに、あっ、今回はここが変わっていたというような楽しみ方とか、いろいろ乗せていくことができると思うので、展示自身の独立性も大事ですけども、館全体をどうプロデュースするのかというところを、もう一つ上の段階としてイメージしなから、廊下とか、そういったところも使って、知的な展示をしていただけたらなというふうに感じました。

○市川会長：山本委員さん、何かございますか。

○山本委員：皆さんから、すごい意見が出たので、余りないのですけれど、一番初めのページに、マザーレイク21計画の「暮らしと湖の関わり再生」とあるんですけど、それの中で「関わり再生」というのはどういうことかなと自分なりに考えたんですけど、今の子どもたちと、私たちが子どものころとは環境に触れ合う度合いとか違うと思うんです。というのは、子どもなんかは今、山とか川とか池とか、自由に行けるような場所というのはなかなか制限されて、ないと思います。ましてや、そこに大人と一緒にいって、いつでも自由に自分の調べたいことを調べてみたりという機会は、僕たちの子どものころよりは、ないと思うのですね。

それを踏まえて考えたところで、博物館は確かに来てみれば、すごいものがあって、素晴らしいです。でも、博物館の関係の方に怒られるかもしれませんけども、どんな展示をしようか、図鑑や事典の延長でしかないように思うんです。これは申しわけない言い方ですけど、ミニチュアや人工物よりも、本物のフィールドに出て地域で学ぶほうが素晴らしいことだと思うのです。

ただ、その先に博物館に来て、博物館で資料を見てから地域で調べる。それか、地域で調べてみたものを、わからなかったから博物館に来て確認する。こんなことができれば、子どもたちはもっと博物館にも興味を持ったり、先ほど言った「湖の関わり再生」なんかにつなげていくことがあるのかなと自分なりに考えるんですけども、この世の中で、なかなか学校でも余り危険な場所へは行かさないようにされると思うんです。そ

れは子どもたちの命を守ることなので、当たり前のことですけれども、今、博物館なんか  
がやっておられるようなイベントの中で、こんな場所に行ったら、いろんなことが調べ  
られるよとか、子どもだけで行けないのならば、博物館から手配するとか、学校の手配  
もあるんでしょうけれども、ここは大人がついていけば調べられるから、調べたことをま  
た博物館に持って帰って、確認しようねとかいうようなイベントなんかがあったら、ま  
た一つのいい学習の場ができたりするのではないかなと思ったことがあるんです。

その中で、何か言葉にまとめることが今ちょっとできなかつたんですけども、自由に  
自然の中に入れる情報を博物館なんかからも提供してあげるし、展示してあるものに対  
しても、これを調べるには、この地域の、この場所ならば安全に調べられますよとい  
うような説明とか案内とか、情報提供とかがあればなというのが、私の感じたことです。

○市川会長：ありがとうございます。非常にいい意見だったと思います。博物館での体  
験と野外との体験をどうやってリンクさせていくのかというのが、これから一番大事な  
ことじゃないかなと思います。

私のほうからちょっと言わせていただきますと、例えば体験展示ですけど、B展示室  
の中に、回すと水が上がってくるのがありますよね。できたら、あれは実物大のもので、  
水を汲むのがこれだけしんどいというのがわかるような展示だったら、もっとおもしろ  
いなという気がします。

それから、大人のディスカバリーですけど、先ほどから化石の話がよく出てきますが、  
子どもころ化石掘りをしたいなと思って、できなくて、そのまま大人になってしまっ  
た大人が山ほどいると思う。そういう大人たちに、プロがやっているような化石の削り  
だし作業を体験させるコーナーとかがあったら、人が来るんじゃないかなという気がし  
ます。いかがでしょうか。

これからリニューアルしていくのに、いろいろお金もかかります。水族飼育展示コー  
ナーでは、裏の設備類がかなり傷んでいるはずですが、そういうものにお金をかけてし  
まうと、表のお客さんが見えるところのリニューアルがほとんどできなくなってしま  
います。お客さんから見えるところもリニューアルしていただきたいなと思います。

○事務局（里口）：お金の問題は切実な問題ですが、それは置いておいて、体験的な展示  
は我々もどうしたらいいかというのはかなり悩んでいて、今、アイデアをいただいたよ  
うな内容も検討したいとは思いますが、実物を用意するというのはかなり難し

いですね。そういうことを体験できる博物館が日本の中に幾つかはあるのですが、そういうところは博物館の裏に化石がわんさか出る山を持っているとか、そういうようなところができる場所だと思うんです。

疑似体験でもいいから、やってもらいたいという思いと、山本委員が言われたように、フィールドとどうリンクさせるかというところが一番の悩みどころだと思います。もちろん、琵琶湖博物館は開館当初からフィールド運用の博物館だというふうに言っていますし、リニューアルでもその方向性はもっと強化したいというふうに考えています。

例えばこの展示の冒頭にありますように、地域を一番よく知っているのは地域の人びとだと思いますので、地域で活動している人たちと一緒に地域を紹介する展示コーナーをつくるとか、そういう人たちが展示室で何らかの活動をすることによって、フィールドへもっと誘えるんじゃないかとか、そういう人たちが地域に出ていくときに、そういうことに興味のある来館者を連れていけるような活動をするとか、そういうふうに広がっていけばいいなというふうには思っています。

ただ、それを広げるための仕掛けというのはなかなか難しいかなというふうなことが、今は実感としてあるのですけれど。

○市川会長：まだ少し時間がありますので、どうぞ。

○津屋委員：私、びわ湖ホールの評議員をさせていただいているのですが、実は青少年オペラがあるのですが、子どもたちのためのオペラですけれども、最近、どんどん中高年の方がたくさん入っていらっしゃいます。

逆に、本物のオペラのほうは、青少年に対して1万円ぐらいするチケットを2,000円とか3,000円とかという席を設けたら、今度はオペラに若い人たちがどんどん入っていく、そういうことでいろんな敷居が変わっていています。子どもたち向けにということ強化されたことで、びわ湖ホール自体が、いろんな空間の利用の仕方が大きく変わっていったのです。ロビーでのコンサートは毎回、バギーで乳幼児を連れてお母さんたちがいっぱいなんです。

今回、まずこの絵を見せていただいて、いろんな検討会でも「交流」というキーワードがあったのですが、この中に「交流」という文字がないので、「交流」という文字が入ると、そういったものが相互に交わっていくという感じになるかと思うのです。

この絵のことはともかく、交流空間のところですが、いつ来てもワクワク体験できる

スペースをつくるのは大変なことです。いつもやっていたら、余りワクワクしなくなってしまうのかもしれないので、そのあたりはディスカバリールームにお任せして、私は仕事柄、美術館・劇場とのコラボが多いのですが、今から20年ぐらい前は東京に住んでいまして、世田谷美術館では、美術館でありながら、あるときはロビーがコンサートホールになってしまいました。それも夕方からコンサートをやると、ふだん見られないミュージアムの姿の美しさに驚いて、非常にすてきな空間だということを再発見したりするのですね。

それで、いつ来てもワクワクということができたら良いのですが、とっておきの体験スペースというような、スペシャルな異種コラボもできたら、新たな博物館の空間の楽しみ方とかが出てくるように思います。最近特にヒットしている夜の博物館ツアーが大成功をおさめておられますが、これはもう四季、春夏秋冬やってほしいなと思います。

先ほど松江委員がおっしゃった体験でも、ただ単に楽しめるではなくて、例えば、私は昭和30年代生まれなので四季折々の日本の、その時々 of いろいろな行事、月見をするときは、おだんごをお供えしてとかいう体験をしているのですが、今の若いお母さんたちの子どもたちは、そのリアルタイムでの体験というのはほとんどできなくて、教科書とかで、こういうことがあったよと、知ることしかできないので、逆にそういう生活文化のこと、伝統・風習的な、四季折々の行事に合わせた貴重な、ここでの展示も活かしながらの体験プログラム、例えば夜に月見をしようとか、ウサギさんがあそこで餅をついているよというお話をしながら、さらに上の世代は、ほんとに子どものころ、そうだったなというような体験というのも大切に思います。

だから、いつ来ても・・・なんて、そんなに頑張らなくていいと私は思います。逆に、ここぞというときに、すてきなプログラムをプロデュースしていただくほうが、かえって多くの人に来られるのではないかと思います。

最後に、これは以前にも言いましたが、来館者だけを博物館の参加者と捉えているかという、琵琶湖博物館は特に地域のフィールドへ広げた、人の育ちという非常にワイドな捉え方なので、利用者や参画者という形で、そういった参加者の数も琵琶湖博物館がともに育てていく人たちと捉えると、入館者だけの数で、博物館の評価を県がしていくというのは、もう違うのかなと思うので、そのあたり新たな捉え方として、広く捉え

てもいいのではないかなと思うのです。

○市川会長：はい、どうぞ。

○中田委員：今、津屋さんがおっしゃったことに私も以前から思っていたのですが、このセミナー室を使ってよく講座をされていますよね。あれは、たしか来館者数に入っていないですよね。私もこのところ来られてないんですが、以前によく来させていただいたときには、結構満席になったということも多かったように思うんです。そして、安土城博物館での講座には私も行っているんですが、あそこでは資料代として300円とっています。ここでの講座でも資料のプリントなり何なりかかるのですから、300円ぐらいはとってもいいんじゃないでしょうか。そして、その資料代をとることによって、あそこは入館者数にカウントしていると思うんです。ここなんかかなり専門的なことをして、せっかくいい講座をされているんですから、あれは入館者数にカウントできたらいいなと私は思っています。そうすると、大人が来ている人数はすごく増えると思います。よろしくをお願いします。

○事務局（田中課長）：カウントさせていただいております。

○中田委員：ごめんなさい。でも、資料代ぐらいはとってください。

○篠原館長：資料代をとるかな。

○中田委員：資料代で300円ぐらいですね。安いほうが私たちはありがたいですけども、されたらいかがでしょうか。

○篠原館長：また考えさせていただきます。

○中田委員：もったいないです、あれだけの話をただで聞くというのは。

○市川会長：はい、どうぞ。

○山本委員：私、障がい者の団体から来ているもので、これを伝えておきたいと思って、また改めて言いますが、ユニバーサルデザインに基づく施設利用を一層推進するというのは12ページのほうに書かれてあるので、何回も言っていることですが、この博物館ができて17年目にリニューアルということなので、多分、17年前は一番考えられるよいユニバーサルデザイン、バリアフリーの博物館をつくられたと思うのです。

でも、皆さん御存じのように、こうしてほしい、ああしてほしい、変えてほしいというのはいっぱい聞いていると思います。そのときに一番考えられる最良のシステムを導入しても、こういうふうに変化している状態なので、今こんなものでいいやろうという

ようなバリアフリーの考え方をされないと思いますけども、より一層、一番よいという  
ような博物館であってほしいので、その辺、お金はかかりますけども、よろしくお願  
いします。

○前田委員：すみません。

○市川会長：はい、どうぞ。

○前田委員：前回の協議会のときに、「はしかけ」「フィールドレポーター」以外の新し  
い市民活動を立ち上げる計画についてお尋ねしましたら、まだ発表できる具体的な内容は  
できていないとおっしゃいました。今回の協議会でこの計画案が出てくると思っていまし  
たが、見当りません。利用者のニーズに応える新しい組織について、できましたらご説明  
をお願いします。

○事務局（柗永）：ここに書けないのが心苦しいのですが、鋭意検討中のところでありま  
して、ぜひ次回には。

○前田委員：まだ検討中ですか。検討中はわかりますけど、でも、話し合いはきつとなさ  
れていると思いますので、少しだけお聞きすることはできませんか。

○事務局（柗永）：一番問題になっているのは、どうしてもメンバーが固定化していたな  
というのがある。これはうちだけじゃなくて、全国的に何か組織があると、どうしても  
固定化してくるのが世の常なので、それをぜひ打ち破って、敷居は下げるようになって、  
間口は広くして、いろいろなタイプの方を受け入れていけるような仕組みをつくってい  
かないと。

○前田委員：固定化というのは、何が固定化ですか。

○事務局（柗永）：メンバーです。

○前田委員：メンバーの固定化は、別に構わないのじゃないでしょうか。

○事務局（柗永）：来られる方にとっては、僕らもちろんウエルカムですけども、さら  
に多くの人を受け入れていきたいというのが博物館としての使命でもありますし、館  
員の気持ちでもあります。

○前田委員：それは、「はしかけ」「フィールドレポーター」以外の活動が必要というこ  
とに、どう繋がるのですか。今ある組織ではできないのですか。

○事務局（柗永）：同じでも結構ですけども、現実グループが増えてないものもあります。

○前田委員：変えることによって、新しい人も入れようということですか。

○事務局（榊永）：はい。もちろん同じ方法でたくさん来てくださると言い続けているんですけど、なかなかそれが打ち破れてないところがありますので、それを変えるにはどうしたらいいかという議論で、一方では、新しいというのを打ち出すと来てくれるんじゃないかというふうになりますし、前田さんがおっしゃるように、今のままでもどんどんウエルカムでも結構かもしれない。その議論が平行線上にありまして、なかなか踏み出せないというのが現実です。

○前田委員：いつごろ固まりますか。

○事務局（榊永）：一応、リニューアルしたときにどんと行くんじゃなくて、来年度、再来年度からも少しずつは試行していきたいなというふうにまとめていこうとしているところです。だから、リニューアルにはばあんというわけじゃなくて、少しずつ、たんび、たんびにやっっていこうかなというような状況です。

○市川会長：固定化しているメンバーを増やしていくためには、新たなものを立ち上げるか、今あるものを掘り下げるか、どちらかだと思います。固定化そのものは、そんなに悪いことじゃなくて、固定化が組織を育てるという方向にきちんと働いていけばいいんだけど、固定化したために逆に組織が萎んでいくということになってしまうと、まずいなという気がします。

とにかく新しい人をどうやって獲得していくかということが、育てるということにつながっていくわけで、新しい、いい方法をやっぱり考えてほしいと思います。

ほか、何かございませんか。はい、どうぞ。

○中田委員：何回もすみません。

ここは、たしかボランティアガイドはいないのでよね。こういう博物館ですから、かなり専門的な知識を持った方が要るということで、いらっしゃらないんじゃないかと思うんですけども、県の近代美術館では期限を区切ってはボランティアガイドを募集していますね。例えば、今回の特別展示は期間が長いのでよね。そういうところに特化してボランティアガイドを募集するとか、そういうのも宣伝の一つの発信としてできるんじゃないでしょうか。

そして、団塊の世代という言い方はおかしいですけど、そういう方が今すごく地域に出てきています。特に男性は専門的な素養を持った方がいらっしゃって、それを埋もれさせるのはおしいなという方がたくさんいらっしゃいます。週に半分だけ仕事に行っ

いるとか、そういう方もいらっしゃるんですけども、何かを見つけるとすぐのめり込んで、専門的なことを発揮する方が多いようにお見受けしているのです、今、私が関わっているところでは。

その育成のための講座とかも要りますけれども、そういう方のボランティアガイドの募集も、この博物館の宣伝を兼ねて募集したらいかがかと思います。ずっとでなくて、1年間とか期限を切って、そういうふうなのはいかがでしょうか。一つ提案として受け取ってください。

○事務局（柗永）：ありがとうございます。

そうですね。今、そういう説明ガイドに限らず、やっぱり何かを発揮したいという要望が多いですね。それに応えていくこともありますので、何かしたいなと私も思っていますし、もしも宣伝を兼ねることになっても実際するとおっしゃってしまして、そういう立場で一緒に盛り上げていきたいと思っていますので、ぜひ参考にしていきたいと思っています。ありがとうございます。

○津屋委員：すみません。フローティングスクールでの関係がどうなっているのか、状況を聞きたいです。滋賀県教育委員会の教育振興基本計画では、「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」ですが、それと、びわ湖ホールの「ホールの子」が入って、実は5本目に、長年推進してきました陶芸の森を中心とした、土に触れる陶芸体験「つちっこ」が入ろうとしています。そういった中、琵琶湖博物館は県内の文化施設の中ではトップの入場者数を誇り、たくさんの学校さんが県内外から来られている実績は誇るべきことですし、かつて、フローティングの中で連携していましたが、棧橋の件は以前聞きましたが、琵琶湖博物館は今はフローティングでは連携していないのでしょうか、今はそのあたりどんな状況ですか。

○事務局（藤村室長）：おっしゃるとおり、以前にこちらで展開していただいて、琵琶湖博物館にも来ていただいたんですが、我々も復活を強く要望しているんですけども、予算的な関係もあって、現在はできてない状態です。

○津屋委員：びわ湖ホールの「ホールの子」事業の予算が増えていますし、県も力が入っているんですけど、学校連携をどこよりも早く取り組んでいらっしゃる琵琶湖博物館さんと、フローティングとの連携が、どうしてもハード面で予算の部分が難しければ、逆に「びわ博っこ」という6本目の事業になったらどうでしょう。そうなれば、県内の子



どもたちは滋賀県にいる間に100%琵琶湖博物館に行くんだという、そのぐらい大きな夢を、このリニューアル構想の中に持って行ってほしいなと思うのです。もっと、目立つ、わかりやすいものがあると嬉しいなと思います。

そういう意味で、「環境学習センター」が10ページにちょっと書いてあるんですけど、滋賀県の環境学習の核となるセンターが、最終的に琵琶湖博物館に位置づけられて、県の教育委員会から先生が出向して、ちゃんと居ていただける。このあたり実は素晴らしい実績だと思います。滋賀県の教育振興基本計画の中で、6本目の柱に「びわ博っこ」構想を入れていただき、滋賀県の教育としっかり組んだ取り組みを、ここに入れていただいたらどうかというふうに思います。これまでの学校との連携は、本当に素晴らしい実績だと思います。

○事務局（榊永）：ありがとうございます。

○市川会長：それと、11ページに大学と連携し云々と書いてありますが、伴先生、いかがですか。

○伴委員：これは、具体的にはどういうことですか。研究面のほうになりますかね。

○事務局（藤村室長）：大学とパートナーシップ協定を結びまして、例えばその大学の学生さんは、その学生証で琵琶湖博物館を見られるというような協定の中で、そうした例がありますので、それを考えているんですが、それだけじゃなくて、この琵琶湖博物館の資源を活用しまして、大学の学生なり院生の方が、こちらで研究・調査なんかをされた場合に、単位の認定というか、合格というか、そうしたものができるといような制度設計ができればなということ、今これは検討している最中でございます。

○市川会長：11ページの最後の行に、「タブレット等を活用した管内や展示案内」と書いてあるんですが、来年ぐらいから小学生がタブレットを持ち始めて、10年ぐらいたったら、今みんながスマホでやっているような感じで、小中学生がタブレットで何でもできるというような時代が多分やってくる。博物館のほうも、そういう時代に対応できるようにしていかなきゃいけないんじゃないかなという気がしますね。

サブ的に活用するんじゃなくて、もっと積極的に活用を考えてもいい時期がそろそろやってくるのかなという気がします。いかがでしょうか。

○事務局（榊永）：ありがとうございます。ぜひとも積極的にICTを扱っていきたいなと思っています。学生がありますので、できるだけ館内をデュアルで見たい

など思います。

○市川会長：ほかに、何か。まだちょっと時間があるんですけど。

はい。

○菊池委員：9ページのところに、レストラン・ショップのことが書いてあるんですけども、前のときにも申し上げたんですけども、レストランは本当に大事だと思っ  
まして、私は今、守山のほうのホテルでもしているんですけど、窓口としてどこをと  
るのかというのが、現状を必ずしも見たいだけではなくて、レストランに行きたいとい  
うところから、このミュージアムが何かを表現することも十分できると思いますし、先  
ほど津屋さんがおっしゃっていましたが、東京等だと本当に美術館の内容とレストラ  
ンは全面的にコラボして、そのメニューのほうでお客様が総合的に楽しめるとか、いろ  
んな可能性を持っているものとして考えて、レストランも充実させていただきたいな  
というふうに思います。

ホテルのほうでも、滋賀県のものをどこで食べられますかとよく聞かれるんですけれ  
ども、本当に自信を持って滋賀県のものをきちんと扱っているところが少ないという  
のが滋賀県の現状でもありますので、こういったところが率先して、そういう場所をつ  
つていただけたらいいなというふうに思います。

あと、以前に、企業との連携ということも積極的におっしゃっていたかと思うんです  
けれども、前のワークショップのときのファシリテーターをさせていただいたんですけ  
れども、企業の皆さんのほうでは、どちらかという、セミナーとか研修のほうをしっ  
かりさせてもらいたいということでした。

あと、きょうのまさにテーマになった「生物多様性」というところが、企業のテーマ  
としてやらなきゃいけないことだけど、わかりづらいということもあって、その生態系  
管理みたいなことを、実際に社員が参加をしながら学べるような場所が欲しいとい  
うことをおっしゃっていたのです。博物館に来たときに、もちろんその全員が来館者とお  
迎えをする側ということではなくて、自分たちが参画しながら、この博物館を育てて  
いるんだというような意識が持てる関わりをもっともっと増やしてもいいのかなとい  
うふうに思っています。

例えば、琵琶湖博物館の場合、植生管理をするときに企業の皆さんの検証を受けな  
がら手を動かしていただくとか、さっき津屋さんがおっしゃったような四季折々のとい

ときに、地元のおばあちゃんたちが自分の家を飾るようなことも、例えばその生活展示のところで有志を集めて、自分たちの展示をやっていただくとか、皆さんの得意分野で少しずつ力をかりながら、お金がかかるところは減らして、かけたいところに回していくというような、参画の仕組みをもっと取り入れていかれたらいいかなというふうに感じました。

○市川会長：それに対して、お答えですか。

○事務局（柁永）：レストラン・ショップにつきましては、博物館ができた当初から展示の一つと考えていまして、リニューアルに関しても、さらにそれを進めていきたい、ぜひ頑張っていきたいなと思っています。よろしく願いいたします。

○篠原館長：全体の話で言うと、お答えになるかどうかわかりませんが、きょうも出ていました「博福連携」、福祉関係と博物館との連携、それから私が前にも言いましたけれども、産業界と博物館との連携、「産博連携」という言葉がこれでいいのかどうか知りませんが、それに琵琶湖博物館ではすでに取り組んでいる「博学連携」の三つを今後重要視して博物館運営を考えていきたいと思えます。

私がここに来た当初、小学校と中学校の連携はずっとやってきていまして、それをどんどん拡大する方向に行っているわけですが、高校・大学との間はないということがあって、今回、大学とパートナーシップ制度までは行っていませんけれども、「大学・地域コンソーシアム」という滋賀県にある11大学と博物館との連携を結んだということがあります。

パートナーシップ制度というのは科博なんかやっているのですけれども、大学側に一定程度のお金を払ってもらえれば、1回生から4回生まではほとんど無料で来られるという制度です。1万8,000人いる立命館でも、アンケートをとったことはありませんけれども、ほとんど来たことがないのですよね。学生は毎年変わっていくので、伴先生がおられるけれど、県立大学の学生が全員来ているかどうかわかりませんが、それで今回のような「生きものがたり」でも、「たんぼ」のときでもそうですが、講義の一環なり、環境問題の一環なりで来ていただくとありがたいと思えます。あるいは、その図録を副読本として使っていただけるようなシステムができないかということを考えてはいるんですけど、今やっと大学・地域コンソーシアムとの間に連携ができたばかりなので今後こうした方向を考えていきたいと思っております。

その3つの方向を我々としては進めていきたい。きょう博福連携という言葉は初めて聞きましたけども、いい方向ではないかなと思います。それと産博連携、博学連携の二つも今後とも進めていきたいと思っています。

○市川会長：うちの水族館もリニューアルして、エレベーターやスロープをたくさんつくりました。また、デイサービスの老人が無料だということもあって、毎日のように車椅子を使ったデイサービスの方がいらしてます。それで喜んでいただいています。

あと、さわれる水槽を、小さい子ども用に低くつくったために、障がい者の方は車椅子に乗ったままさわれるのですね。そこは非常に喜んでいただいています。車椅子用に考えてつくったんじゃないなくて、小さい子供がさわれるためにつくったのですが、それが車椅子の方にちょうどいい高さになっていて、非常に喜んでいただいています。博福連携を意識してやっているわけじゃないんですが、結果的にそういうふうになってよかったなと思っています。

○津屋委員：すみません。

きょういただいた資料を見せていただいて、大学との連携という部分ですが、研究員の経歴というところを読ませていただいて、私が感動したのは、特に特別研究員のところなんです。研究員の中には知っている方も中にいらっしゃって、ここを出られていても、来年に向けての研究を、琵琶湖博物館が個々の研究に協力をしていらっしゃるという姿がここから感じられました。この中には大学を卒業してからもずっと琵琶湖博物館とともに活動してきたという、まさに育った人たちがこの中にいらっしゃるので、そういう意味で、大学生で環境などに関心のある学生が目指すところに、こういう特別研究員という受け皿というのがあるのでしょうか。

○篠原館長：その新しい大学パートナーシップ制度の中でのものというのは、科博のほうでもやっていますし、そこではそういうのはあるようです。ここではまだその段階にまで至っていませんけども、これからどうやって協力を考えていくかということ、やっとならば大学・地域のコンソーシアムの中の協定ができたので、これから考えていきたいと思っています。

○津屋委員：大人の方たちも、中には知的な好奇心がとても高い方がいらっしゃって、さらに高みを目指したいと思われる方にとっては、余り外には出ていない情報かもしれませんが、学芸員さんと違う、こういう特別研究員一人一人のすごく細かい研究を、琵琶

湖博物館が本当に支えてくださっているというのはすばらしいことだなと思うのですね。研究機関ならではのことで、美術館ではこのようなことがなかなかできませんので、こういう受け入れ先もあるというのが、とても頑張れるものになると思ったのですが。

○事務局（里口）：今の特別研究員のことでちょっと補足しますが、これまで大学のポスドクの学生が博士を取得した後に、その学生が特別研究員になりまして、そこで科研費などの研究員として申請しまして、それで将来研究者とか巣立って行って、その期間に博物館とか事業活動とか講演とかもしていただいておりますし、そういった制度を活かしているところです。

○伴委員：多分その制度の問題なので、お金がどこから出るかという問題に帰結するんですよ。今おっしゃったように、学術振興会というのがお金を出しているんで、それで何か校が受け入れになっているというだけの話なので、そういうのが例えば県で用意ができたりすると、ここに大学院を終わった学生が来たり、そうじゃなくて研究に興味がある方が一定の人数、ここで何か研究をしたりということができるようになるかもしれませんけれども、それは制度の問題だと思いますけど、ここは受け入れるキャパシティがあるので、制度の問題だと私は思います。

○市川会長：はい、どうぞ。

○中田委員：もう1つお聞きしたいんですけど、県がやっている「淡海（おうみ）生涯カレッジ」は、ここが受け入れ先になっていませんよね。実は私、その淡海生涯カレッジの1期生で、その後も何回も受講して、後ちょっと運営される先生のお手伝いをしたこともありました。今しばらく離れてしまっていますが、そのおかげで実は滋賀大学の環境教育のほうへ行かせてもらいました。あそこの環境教育の学生を何とか使えないかなと思います。滋賀大に環境教育コースがあるんですけど、滋賀大は地域に余り溶け込んでないなというのが今すごく思いました。

そして、淡海生涯カレッジというのは、第一段階が地域の公民館なり、そういうところを使って、まず4回か5回か勉強をします。その次が高校とかを使って実際的な実験とかをします。それも5回です。その後13回が大学でしていますから、県立大ももちろん参加されていますが、大学での授業に参加します。

それから、土日に行う普通の特別授業、それから希望者は平日の授業にも入れます。そういうので結構裾野が広がっているのです。そういう生涯学習の応募者が意外と多く

て、私は最近の事情がわからないので余り言えないのですが、たしか琵琶湖博物館さんはそれに入っていなかったの。

○篠原館長：レイカディアのことですか。

○中田委員：レイカディアではありません。滋賀県の教育委員会がやっています。だから、環境教育をやる生涯学習が淡海生涯カレッジです。もう1つ、私も関係していますが、近江歴史回廊大学という生涯学習、どちらも教育委員会が2本立てでやっていたものなのです。

淡海生涯カレッジは、最初のうちは環境に特化していたのですが、このごろは生活とか水とか植物にも関わっているんですけども、そういう生涯学習の団体でも一般の人を受け入れる形の一つになるんじゃないかなと思います。県の教育委員会がそういうことを一遍試していただいて、琵琶湖博物館のほうが、もっと魅力を理解してもらえる一つになるんじゃないでしょうか。

○篠原館長：情報収集とそれについての勉強をさせていただきます。

○中田委員：すみません。私はどっちも関わってきたので、あれれと思って。滋賀大の環境教育の学生が50人ぐらいいるのに、ここにちっとも来てないなとか思ったものですから。生活環境の学生もいますので、そういうのをを使うのも一つの手だなと、学生にも、こちらでも、どちらにもメリットになるものじゃないかなと今思いつきましたので、よろしくをお願いします。

○市川会長：最後にもう一人、どうぞ。

○菊池委員：最後に1つだけ。先ほど山本委員がおっしゃっていたのですけれども、博物館で感じたことをどうやって実際にフィールドに持って帰るかという話のときに、博物館の周りにたくさん広場があり、湖のほうにアプローチできる場所があるはずなのに、どちらかというと、本当に中の施設だけを見て、何を感じるか、考えるかというところに閉じてしまっているようなイメージがあって、今回のプランを見ても、外を含めた形状をどう使うのかというところが、なかなか見えてこないというのはすごく残念だなと思っていて、例えば子連れのお母さんだったら、中で子どもが騒ぎ始めたら、もう見られないと思って出ていきますけど、外でもその自然体験ができながら1時間だけでも、恐らくお弁当を持って行って、子どもが騒いだら外で、今やってみた遊びを見ようとか、ハンカチにさわってみようとか、湖に行こうかということで、また戻ってくる

というというような、時間の使い方的にも、もっともっと楽しいことができるのかなと思いますし、正確なことは学んだけど、少しでも手足を動かせるきっかけを博物館の中でぜひ使っていただけるように、広場もぜひ今回の企画の中で重要なポイントとして扱っていただけたらなというふうに思います。

○事務局（榊永）：どうもありがとうございます。今回、10ページで示していますような樹冠トレイルをつくりまして、館内、琵琶湖、あるいはそれにつながるような、当然遊歩道を設置しますし、ベンチ等も置いたりします。ありがとうございます。

○市川会長：時間も残り少なくなってきましたので、このあたりにしたいと思います。

それでは、これもちまして本日の議事を終了いたします。長時間にわたり、貴重なご意見をありがとうございました。

事務局に、進行をお返しいたします。

### 3 閉 会

○司会（中鹿副館長）：長時間、ありがとうございました。

また、委員の皆様には大変長時間にわたり、貴重な意見をたくさんいただきました。現在、中間取りまとめということで、現在進行形でございます。本日、たくさん貴重な意見をいただきましたので、今後の検討にぜひとも参考にさせていただいて、また次回第2回の協議会には、基本計画が多分お示しができるかと思っておりますので、ご期待いただきたいなと思います。

本日は、どうもありがとうございました。

[午後 4時28分 閉会]